

Library News

図書館だより No. 46

Nara National College of Technology

1999年2月 奈良工業高等専門学校図書館発行



(図書館への道・本校名誉教授 石垣 昭先生スケッチ集より)

正門から本館へと続く道沿いに植えられていた銀杏の木が、最近になって何本か切り倒されてしまいました。私の記憶に誤りがなければ、あの木は確か、私が昭和43年に赴任した当時、既にあったように思います。もう三十余年も経っていたはずです。樹齢三十年といえ、ふつう私たちは、堂々とそびえ立つ巨木を想像するでしょう。まして、生命力が強いと言われる銀杏の木のことです。それが、植えられた当時より小さくなって、枯れ果て切り捨てられてしまうなんて、何とも哀しい話です。なぜこんな結果になってしまったのでしょうか、根っこの土が悪かったからだと聞いたことがあります。土が悪ければ地中に根が張らず、根が張らなければ木も大きくは育たない、それで枯れてしまったというわけです。

ここで皆さん、三十年後、五十年後の自分の姿を想像してみてください。もし、三十年後の自分が、今の自分より小さくなり、あの銀杏のように枯れ果て消え失せてしまっていたとしたら、たまらないことですね。木の成長は、根っこによって決まります。地中に深く、いかにしっかりと根を張ったかによって決まるのです。人間の成長も同じこと、高専5年間の学びは、将来に向かって自分の人生の基礎を築くことにあります。皆さんは、切り倒された銀杏ではないのです。この恵まれた環境の中で、しっかりと根を下ろし養分を吸収して、己が人生の基礎を堅固に築きあげて行かねばなりません。どうか、常にそうした自覚を持ち、三十年後、五十年後の自分を見据える気持ちで、日々の勉学に勤んでください。

ノーベル物理学賞を受けられた湯川秀樹博士は、若い頃から「老子」や「莊子」を愛読しておられた。中間子論を考えていて行き詰まった時、この莊子の方法がヒントになって、問題の解決へと導かれたそうです。一見、物理学とは無縁の東洋思想が役に立ったのです。ノーベル化学賞の福井謙一先生も、本校で講演をなさったおり、漱石全集から大きな影響を受けたと話され、視野を広げて

学ぶことの大切さを説いておられました。フィールズ賞受賞の広中平祐先生に至っては、中学時代に音楽に熱中したことが、後になって数学の研究に役立ったと、その著書の中で書いておられます。

こうした話は、学ぶということを考えるうえで、大変示唆的です。つまり、畑違いで無駄に見える学問でも、謙虚に学んでおくことがいかに大切か、よく分かります。既成の枠に囚われない、自由な思考や創造の力は、多様な学びを通してこそ養われるのです。

学ぶのは、もちろん授業に限ったことではありません。皆さんの優れた先輩たちは、例外なく図書館利用の名手でした。皆さんも、図書館の本をじゅうぶんに活用してください。時には、自分の専門科目を離れて読書し、自由に思索してみてください。思考を深め、生きるための知恵は何なのか、追求してみてください。読書の世界は無限の広がりを持ち、図書館の本は懐を大きく広げて、皆さんの利用を待っていてくれます。

現代は、コンピューターやインターネットの時代です。手軽に瞬時に大量の情報が得られ、私たちの受ける恩恵は、計り知れないものがあります。しかし、その電子化された情報は、思索を深める読書という行為とは、本質的になじまない所があります。言葉や文字を通して思考してこそ、生きる知恵も力も生まれてくるというのに、電子情報は、私たちを受身一方に追いやり、結果的に、思考力や想像力を弱めてしまう危険性があるのです。

最近、「本が死ぬところ暴力が生まれる」という長たらしい題の本が出ました。副題に、「電子メディア時代と人間性の崩壊」とあります。読む力、書く力の衰えは人間性の危機であり、社会の危機につながるという認識を示しているのです。無くてならぬものは、実は、そう多くはありません。情報の洪水の中に飲み込まれて自分を見失ってしまう、などということのないよう心して欲しいと思います。「学び、読み、そしてよく考えてみよう」——これが、私の結論です。

図書館は実体験を超えたものの宝庫

同窓会元会長・後援会会長 中 林 義 夫

昨年の奈良高専の入学式の日、時間が余ったので図書館へ立寄りました。懐しい思いで私が学生時代読んだ本があるか捜しましたが、河出書房のグリーンブックス世界文学全集は世代交替をしており、赤い表紙の平凡社の「教養全集」は見当たりませんでした。美しい風景写真の「NATIONAL GEOGRAPHY」、戦艦ポチョムキンを教えてくれた「日本読書新聞」、レベルが高かった明石高専の文芸誌「子午線」等、毎回まっ先に読んだことを思い出しました。

思い出深い本の一つに「ジャンクリストフ」があります。高専3年の頃、こんな筈ではない自分の青春にいら立ち、自信を失っていた時期がありました。救いを本に求め、文学全集を気の向くものから読み続けた中で出合った本でした。主人公は私以上にいら立ち、もだえ、苦しみ、努力してもむくわれず、主人公を理解する数少ない人も必ずしも彼に助力しなかった。そんな中でも主人公は成長し、才能を伸ばしてゆく。そして心の友と言える友人と出会う。私は主人公の生き方に感

動し、涙の出る思いで読み進みました。私のいら立ち不安など、その壮絶な生き方と比べると小さく見え、もっと苦しむ事、もっと努力する事を教えられました。自分が溺れかけていると思っていた所は浅い場所で、世の中にはもっと深い所が存在し、私の将来にも訪れるかも知れない。苦しむ事から逃げようとしたり、努力する事を放棄したりしても何の解決にもならないと考え、何かを始めようと気持ちが変りました。

読書というものは自分の体験、世界、時間を超えた所で、作者が表現しようとした主題を頭の中で追体験するようなものと思います。生き方、物の見方、感情等自分の頭と体験のみでは到達し得ない世界を見せてくれます。知識の広がり、考え方の広がり、人間性の向上等読書を通じて得るものはたくさんあります。ぜひ読書の習慣をつけたいものです。

図書館は自分の体験・知識を超えたものの宝庫です。さあ自分の欲しい宝物を捜しに図書館へ行きましょう。

目 次

巻頭言 学ぶー読むー考える.....	前図書館長 細井 誠司..... 1
特別寄稿	
「図書館は実体験を超えたものの宝庫」	同窓会元会長・後援会会長 中林 義夫..... 2
平成10年度 読書感想文コンクールを終えて.....	3
入選作品紹介.....	5
第11回ブックハンティング.....	13
図書館からのお知らせ.....	15

平成10年度 読書感想文コンクールを終えて

図書館委員会

第23回校内読書感想文コンクールの結果を発表します。応募総数は355編。その中から、図書館委員会と国語科教官による審査の結果、次の8名の作品が入選作となりました。ここにその氏名を記して、その栄誉を称えます。

最優秀	電気工学科1年	玉井 芳英	「沖縄——戦争と平和」を読んで
優 秀	機械工学科1年	黒田 健介	「合成洗剤 恐怖の生体実験」を読んで
優 秀	電子制御工学科1年	深江 輝昭	「十七歳だった」を読んで
優 秀	情報工学科1年	中坊 典史	「兎の眼」を読んで
優 秀	電気工学科2年	柳澤 佑輝	瞳は訴える（「二十四の瞳」を読んで）
優 秀	情報工学科2年	半田 修之	「沈黙」を読んで
優 秀	情報工学科2年	藤原 舞	「蝉しぐれ」を読んで
優 秀	物質化学工学科2年	仁田 友佳	「いちご同盟」を読んで

また、審査の過程で高い評価を得て、最終選考にノミネートされた諸君は次のとおりです。惜しくも入選には至りませんでした。これも氏名を記して、記念としたいと思います。

1 M 森口 幸	1 E 小笠原直忠	1 E 田辺 稔	1 E 谷口真紀子
1 S 阿佐 隆春	1 I 尾本 達紀	1 C 中谷 直輝	2 M 上村 彰宏
2 M 山下 智史	2 E 津田祥太郎	2 S 北川信一郎	2 S 多賀麻以子
2 I 中尾友圭子	2 C 内藤 加奈	2 C 藤沢 明子	

上記以外にも多くの力作が寄せられました。応募された学生諸君には、改めて感謝の意を表する次第です。

以下、恒例に従い、入選作に対して各個的に、勢田の個人的なコメントを付け加えます。

1 E・玉井君の作品は、著者（大田昌秀前沖縄県知事）の伝えようとする所をよく理解し、それを非常に明快な文章でまとめており、この類の読書感想文としては申し分のない出来と言えます。大勢の教官の支持を受けたのも当然で、私もまた高い評価点を付けましたが、一点、「平和」を至高絶対のものとする戦後の価値観で過去を語ろうとする所に、「一兵士として命がけである戦争を戦った父」を持つ一人の中年オジンとして、抵抗を感じたのも事実です。

1 M・黒田君の作品は、対象として理系的な本を選んだ所がポイントでした。読書感想文といえば、つい文学作品、それも小説を選びがちですが、理系の本でもよい感想文が書けるといふよいモデルになると思います。小説だけが読書ではないのだ。

1 S・深江君の作品も選んだ本が Good！ 文章も気楽に書いているようでありながら、とぼけたような独特の味があって、面白く読ませます。その味が読んだ本の内容にぴったりしており、非常に好感の持てる感想文だと感じました。

1 I・中坊君の作品も、自分の考えが素直に表現されており好感が持てます。中学時代、教師になりたかった中坊君が、結局、技術者になるために奈良高専に入学した訳ですが、それでも、今回の経験は、

中坊君の心を大いに豊かにしたものと信じます。

2 E・柳沢君の作品は、反戦小説としての視点から「二十四の瞳」を読もうとする態度で一貫しており、よくまとまった出来上がりとなっています。文章も達者です。「作者の言おうとする所は何か」という態度ではなく、自己の視点から一つの作品を語るのには、「読書感想文」を越えて「評論」の域に一歩を踏み出していると言えます。

2 I・半田君の文章は、「沈黙」という重い作品の、その重い問いかけを真正面から受け止めようとしている所が評価の中心です。「僕にはできない」とか「私なら逃げるだろう」とか、そんな甘い感想を書いていない所が立派です。この重い問いかけに一定の答えはありません。それだからこそ「戦後の古典」と言われる作品となりえていることに、半田君はもう気付いていることと思います。

2 I・藤原さんの作品は、自分の心理を素直に分析し文章化している所が好印象ですが、折角「責任感」というキーワードを設定したのに、文章の後半でそれが流れてしまっているのが残念に思います。読書感想文ではなくテーマ作文として書いたら、もっと素晴らしいものとなったかも知れません。

2 C・仁田さんの作品は、感想文の書きやすい対象を選んでいるのも事実ですが、最優秀作に匹敵する出来ばえだと感じました。読み理解する力、感じる力、文章化する力をこれだけ持っているなら、是非、次のステップ——もっと本格的な作品にも挑戦して下さい。大いに期待します。(国語科・勢田)



入選者の皆さん



入選作品紹介

大田昌秀著

「沖縄——戦争と平和」 を読んで

1E 玉井芳英

日本は、なぜ沖縄をここまで悲惨な状態に追い込んだのだろうか。

こうすることによって、日本は何を得たのか。そして、今もなお続いている沖縄問題をいったい誰が、いつ、解決するというのだろうか。

この本を読んで、僕は同じ日本人でありながら日本人というものが、こんなにも残酷で、こんなにも人間性の劣った人種だったのかと絶望感を覚えた。そして、それと同時に未来を背負って立つ僕達若者が、同じ過ちを辿ってはいけないのだと強く感じた。また、できることなら僕の力で、今の沖縄をみんなの住んでいる日本と同じようにしてやりたいと思った。

その昔、沖縄は平和で豊かな楽園地として栄えていた。それが、日本統一が成され、次に海外侵略を考えた豊臣秀吉の時代から、ずっと現在に至るまで沖縄は、日本人のとんでもない欲望の踏み台として、惨劇を繰り返してきたのだ。年月にして、ざっと三百九十年だ。日本がやらなければ、中国か、朝鮮か、どこかの国がやっていたに違いないと言う人もいるだろう。しかし、やったのは日本人だったのだ。この事実を踏まえて、僕はこれからの沖縄問題を考えていかねばならないと思う。

まず、本文の前半に僕の心を引き付けて止まなかった言葉がある。それは、「国家は戦争を欲し、国民は平和を欲す」という言葉だ。この言葉は、正に国を問わず全人類に当てはまる言葉ではないだろうか。アメリカとイラクのにらみ合いや、北朝鮮と韓国など、国家さえなければ国民は、戦う必要がないのだとさえ思えてくる。国家、つまり、ほんの少数の統治者達の欲を満たすために、多くの国民が死んでいくことは、絶対に許されてはいけないことなのだ。退廃的な考え方もかもしれないが、国民は国家を守るために血を流しても、国家は国民を救おうとはしないものだと思ふ。だ

から、他国の国民同志で戦ってはいけないのだ。むしろ、国民同志は、国を問わず力を合わせて仲良くし、戦争そのものをなくさなければならぬのだと思う。

さらに読み進んでいくと、読むに堪えない惨劇が沖縄県民の上に降り懸かったことが書かれていた。それは、今の僕らには想像もできないようなドラマだった。そして、ドラマの色が汗と泥と血にまみれながら、色鮮やかに僕の脳裏をかすめていった。中でも、

「壕の中に手榴弾が投げ込まれ、壕の壁といわず天井といわず血の固まりなのか、肉切れなのか見境もつかないほど、べったり惨たんたるありさま……。」

という文には、想像を絶する凄まじさを感じられ、地獄としかいいようがないと思った。

次に、戦時下における日本国の住民に対する安全や保護の措置のなさは、沖縄の人達だけではなく、僕の祖父母達にも同様だったと聞いている。しかし、同じ戦うにしてもアメリカは違っていた。今考えれば、白旗を掲げてアメリカ兵の前へ出た方が、人間的な扱いをされたのではなかっただろうか。また、住民に対する安全や保護の措置のなさは、平和な現在も続いているように思う。神戸の大震災に対する処置、次々に発覚する銀行の不始末に対する税金の横流し、そして、何よりも今の沖縄問題など、数えあげれば切りがないではないか。明日は我が身かもしれないと思うと、日本国の不誠実さに怒りさえ覚える。

最後に、本気で人を殺せる人間なんて、そうざらにいるものではない。殺人の矛先にあてられた日本兵の大部分は、たぶん上からの命令でしかたなくやったのだと思う。そして、彼らもまた戦争の犠牲者なのだ。たぶんそうだと、僕は同じ日本人として信じた。そして、何よりもこの本を読み終えて感じたことは、僕らがつくるこれからの日本は、国家を守るよりも個人を犠牲にしないということを第一に考えて、何事も解決していかなければならないと強く、強く感じた。そして、そのことが、国民に愛される真の国家を生むことになると、僕は信じている。

「合成洗剤 恐怖の生体実験」を読んで

1M 黒田 健 介

僕は、この夏休みに、「合成洗剤 恐怖の生体実験」という本を読みました。この本は、家の近くの図書館にあったもので、たまたま目についたので貸りたのです。題名からして、少し怖そうな内容だと予想はしていました。しかし、実際に読んで分かったのですがこの本にはとんでもないことが書かれていたのです。

洗剤には、「界面活性剤」という物質が入っています。界面活性剤とは、なじまない物をなじませる物質です。つまり、油污れを水になじませて、衣服や食器をきれいに洗うのが界面活性剤の役目なのです。界面活性剤を含み、洗浄を目的とするものが洗剤と呼ばれているのです。

界面活性剤には、せっけんと合成界面活性剤の二種類があります。せっけんは、自然の油脂をもとに作られるので、自然を破壊することはありません。しかし、合成界面活性剤は、人間が石油等から化学的に作り出した人工の物質なのです。よって、自然や生物の体を破壊します。この合成界面活性剤が使用されている洗剤が合成洗剤と呼ばれているものです。

実際に合成界面活性剤が生物に対してどんな影響を与えるのかを、筆者はラット（ねずみ）による動物実験で調べました。その結果、合成界面活性剤は皮膚障害を引きおこし、内臓を破壊させたのです。

合成界面活性剤は皮膚から体内に入り、なかなか分解しないという性質を持っています。皮膚から入った合成界面活性剤は皮膚の油分を落とし、皮膚障害を引きおこします。そして、血液にのって肝臓へ行きます。肝臓は有害な物質を分解する作用がありますが、合成界面活性剤はなかなか分解できないのでどんどんたまっていき、最後には肝臓自体が破壊されます。肝臓に限らず体中の内

臓が悪影響を受けていて、場合によっては生まれてくる子供に影響が出ることまであるそうです。

洗剤メーカーは、こんな恐ろしいことを隠して、合成洗剤の便利さだけを強調しているのです。テレビや新聞も、広告費をもらってCMを流しているので、洗剤メーカーを批判することはありません。メーカーとマスコミはぐるになって、消費者を騙し続けているのです。こんなことが許されているのでしょうか。

洗剤メーカーのうそはこれだけではありません。例えば、「衣服が真っ白になる」というCMがありますが、あれは蛍光増白剤という物質で白く染めただけなのです。また、「髪がサラサラになる」というシャンプーのCMもうそののです。合成シャンプーで洗髪を続けると、毛はやせ細り、表面がボロボロになってしまうのです。しかし、なぜか手ざわりはサラサラなので、髪がきれいになったと勘違いしてしまうだけなのです。それから「植物生まれなので自然にやさしい」などというCMもうそです。メーカーは、天然油脂から合成界面活性剤を作り出すことができるのです。つまり、天然油脂から作ろうが、石油を合成して作ろうが、できる物質は同じように毒性を持っているのです。

合成界面活性剤から身を守るには、今のところせっけんを使うしかないそうです。しかし、せっけんにも防腐剤や香料が入っていて、これらの物質も体に有害なのです。また、薬局へ行ってみたのですが、合成界面活性剤を使用していないシャンプーなど、どこにも売っていないのです。いつの間にか私たちは、合成洗剤なしでは生活できなくなっていたのです。毎日、毒薬みたいな物で衣服や食器や頭を洗っているなんて、本当に恐ろしいことだと思います。

とても考えさせられる一冊でした。



「十七歳だった」を読んで

1S 深江輝昭

まず第一に言える事は、この本の内容はとんでもないモノだったという事である。どうとんでもないかといえば、とにかくとんでもないと言えない。その中味はといえば、とある高校生の話である。大人になると昔を思い出す事、なつかしむ事もある。そんな大人が高校生であった時の事を記録した、そんな物語なのである。

ある高校生ムネタケというのだが、このムネタケは東京で生まれ、家庭の事情で岡山へ引っこした。何かの間違いで岡山県立岡山操山高等学校という進学校に合格、そして入学してしまった。最初こそは、周りに負けないように必死で勉強した。しかし、自分の実力にさっさと見切りをつけ、さまざまな事に挑戦する……こう書くと非常にかっこいい。しかし実際の話はといえば、要するに落ちこぼれなわけである。しかし、まあ彼は彼なりに青春を謳歌した。とはいえ彼は自意識過剰であったために苦勞をする。彼はバスケットボール部に所属していた。とはいえ、その高校のバスケットボール部は泣く程弱かったわけである。その弱さを人のせいにし、自分はどんどんやる気をなくした。それから、その当時（いや今もかもしれない）非常に不良がかっこ良く見えたらしい。そんなこんなで、彼は何か反抗がしたかったらしい。ちょうどそこに父親のタバコがあった。でまあ、こっそりと隠し持って吸ってみたりする。自意識過剰なだけに「おお、オレって大人じゃん」などと思ったりもする。しまいには他人に自慢したくなる。そこで話せる相手を選んで……という様にどんどん変な風流れていくのである。

他にもこういう話がある。高校生なだけに勉強をしなくてはならない。御飯も食べて一時間テレビを見て、「さあ、勉強をしよう」と思った矢先、たいてい母親の「テレビばかり見てないで、勉強しなさい、勉強」という言葉が飛んで来る。こ

れはたまらない。その内につまらない事でケンカになる。そこでムネタケは「家出をする」と思い立つわけである。勢い込んで家出したものの、夜遅くに家出したので電車が走っていない。そこで友人H君（不良）と会うわけである。いろいろと話した後、ムネタケはバイクを借りる事ができた。そこで予定を変更して、小豆島へ。フェリーに乗って海を越え、プロロロと島内を爆走する途中で出会った島の娘と一夜の恋に落ち、俺に惚れちゃいけねえぜ、イヤーンムネノリカムバーク(?)という妄想をいだきつつ、H君の家で一夜を過ごし、出発する……。結局どうなったかという、島に渡ったはいいが、美女と出会う事ができず、寂寥感がつのも、岡山港へ帰る。「学校にでも行ってみるか」などと考えて、行ってみるとクラスメートのS本君に「もうすぐ期末試験やで」と言われて、あっさりと家に帰ってしまった。これを見て「青春しているなあ」などと思ったりするのは私だけであろうか。

とまあこんな話がまだまだあるわけである。この「十七歳だった」という本は。中でも授業中にトイレに行きたくなり、行けばかっこ悪いと思って我慢する。などという話があって、その話は自分にも身に覚えがあって非常にはずかしかった。何よりこのムネタケという人物の性格もあり、この本は青春の恥とでも言いたくなる。しかし、よくよく考えてみたら青春とは、こんなものではないかとも思える。自意識過剰になり、妄想をいだいて失敗し、恥をかく。このムネタケという人物はいき過ぎだとは思いますが、いつか自分にもそんな恥ずかしく、また楽しい高校生活であったと思える日が来るのだろうか。何にしる、このムネタケという人物と同じ様な青春の謳歌の仕方だけはしたくない。流石にこれだけの恥は私もかきたくない。青春もほどほどに、そう思う事のできる本であった様に私は思う。



「兎の眼」を読んで

11 中坊典史

自分が「兎の眼」を読もうと思った理由は中学生の頃、教師になりたいと思っていたからだ。小学校は一年生から六年生の時まで、すべて女の先生だった。だから一度でもいいから、担任が男の先生になってほしいという願望が強かった。だから中学校に入学して、クラスの担任が男の先生になった時、色々な事を期待した。その先生は期待したとおりの事をやってくれるすばらしい先生だった。明るく陽気な先生で怒る時は決してどなったりしない。生徒一人一人と話し合っただけでその生徒がおかれている状況を把握して対処してくれるそんな先生だ。だから当然クラスの中は和やかになるし、とても明るいクラスだった。自分はそんな先生にあこがれ、教師になりたいと思った。だからこの作品にとっても興味がわいた。

話の内容は小谷先生という新米の女性教師が、様々な人物が織りなす小学校という教育現場で、児童と共に成長し、人はどのようにして生きていけばよいか、また教育とは何かを問う。また登場人物一人一人が個性豊かでおもしろい。型破りだが、新鮮で分かりやすい教え方で子供たちと親しい足立先生。戦時中、友達を裏切って死においやってしまった罪を背負って今まで生きてきたバクジいさんなど、数え上げたら切りがないほどである。

この作品で一番考えさせられたのは、教育の難しさだ。勉学を教えるだけなら、いかに楽しく分かりやすい授業をすればよいかということ、追求するだけで良いだろう。現に、高校や大学はそう。しかし小学校は全く違う。教師と児童が密接な関係にあるのだ。したがって教師は良き理解者にならなければならない。しかし現実はどうもそううまくいくものではない。話の中でも小谷先生はうまくいかずに悩む。自分になかなか心を開いてくれない児童がいたり、大勢で一人の子をいじめ差別したりなど予想もできない事が次々と起こる。

しかし悪い事ばかりでもない。クラスに編入してきた障害者の女の子を、全員であたたかく優しく迎えたり、心を開いてくれなかった子が少しずつ心を開いてくれるなど、苦労や努力をした分、良い事が返ってくる。小谷先生も赴任したての頃はあわてたりとまどったりする事が多かった。しかし児童と接したり、教育に真剣に取り組むうちに、冷静に対処できたり、心に余裕ができてくる。このことから教育というのは子供に教えるだけでなく、自分も子供から様々な事を習うものだと感じた。一方的に教えるだけでは、良い教師と言えないだろう。子供と一緒に成長していくことこそ、一番大切なことだと思う。

中学生の時、理科の先生に教師とは何か聞いたことがある。その先生は植物を育てるようなものと言った。よい土や光のあたる場所に植えればよく育つし、肥料や水を与えればもっとよく育つ。要するに植物は生徒でありよい環境やよい影響があれば、豊かな心をもつ人間に育つということだ。当然悪い条件で育てれば、立派にならない。例えば添え木をあてたとする。育てる者にとったら、思いどおりの形に植物は育つだろう。しかしはたから見れば自己主張がなく、不自然に見えるだろう。子供でもそうだ。自分の考えをもたず、他人の考えに染まり、自立性のない人間に育ってしまう。

根をおろし葉をつけた植物はやがてつぼみをつけ花を咲かす。作品の中で足立先生が「まだタカラモノをねむらせているかもしれんな。」と言う場面がある。このタカラモノは植物の花にあたるのではないだろうか。人によって色々と違いうが、自分自身を引き立てる物であると思う。

これからは色々な先生と積極的に接してゆき、自分を磨こうと思う。



瞳は訴える （「二十四の瞳」を読んで）

2E 柳澤 佑輝

「お国のために死んでこい、それを否定する者は非国民だ。」

男子は兵士になることを誇りに思い、女子はその日の生活を守るために一日中汗水を流す……。子供の個性をも奪いかねない教育、教室の中で国定教科書を通してしかふれ合えない教師と生徒……。それらを生み、崇拜させたのは「戦争」であり、そこからつくられた冷たい「時代」でもあるのではないだろうか。

この本には十二人の初々しい子供と、彼らを担任する女性の教師、大石先生とのやりとりから、戦争についてが描かれている。無邪気でかわいらしい生徒たちも、男子は戦争に駆り出され失明する者、戦死する者、女子は家をあげ渡さなければならぬほど貧しく、あげくの果てには親に売られてしまう者、家族が病気で死んでいき、親類にもらわれていく者など皆、戦争が激しくなるにつれて幸せから遠ざかっていったのだ。何とむごいのだろう、何と恐ろしいのだろう。それでもなお、戦争だけを見つめ、信じていなければならぬ時代なのだから余計に残酷だと感じた。

実はこの大石先生は、反戦思想を心にもっている人で、自由を縛る治安維持法に反対し、自分の生徒が戦争にいくときも「生きて帰りなさい」と、国の勝敗より人の命を重んじている。しかし、それを世間に伝えることはできない。反戦思想を唱えようとでもすれば手が後ろにまわる時代では、心の中にそれを押さえつけておくしかなかったのだ。後に自分の夫が戦死し、長男が周りの環境から軍国主義者になり、長女が病気で死んでしまうが、それでも口をふさぎ、目をおおい、耳をおさえなければならぬというのか。彼女はどのような気持ちだったのだろう。きっとやるせなかったに違いない。門標が名誉の証？ 命とひきかえ

にただの木ぎれをもらい、心の底から喜ぶ家族などいるわけがない。そんなものと交換されるくらい、命は軽いものではないはずなのだから……。

戦争に左右される十二人の子供の成長をも、この本は描いている。幼く、はつらつとした生徒たちは大石先生が年をとると同じように、確実に精神面で成長していった。とはいえ、良い方向に成長した者ばかりではなかったと僕は思う。いや、この時代にすれば良い成長だったのかもしれない。心の奥まで戦争に侵されつつ彼らは信じていたのだ、国のために死ぬことが自分のためになると。この本は、久しぶりに、生き残った生徒たちと大石先生とが会い、そうやって死んでいった生徒を偲び、心の痛みを分かち合おうと語り合っているところで終わっている。確かに全員はそろっていないが、そこには昔みんな撮った記念写真と同じく、二十四の瞳がそろっていたことだろう。

戦死した人も、物や食糧の不足で死んだ人も、病気で死んだ人も、みんな戦争の犠牲者だと思う。二十四の瞳に映る希望の光は、戦争という闇のうち消され、濁されていった。それぞれが体験した様々な境遇……。十二人の生徒たちが、恥ずかしそうに自己紹介をしていたところを読み返すと、胸が痛くなる。この頃、誰が自分が失明したり、ましてや命を失うことになるかと予想したのだろうか。この本にでてくる人は皆、つらいことがあっても涙をこらえて笑ってみせている。誰もが自分の二つの瞳で、悲鳴のあがるような過去を見つめ、悲劇を繰り返さないように未来を見つめることができれば、つくり笑いは本当の笑顔になり、人々の瞳には輝きが宿るのではないか。死んでいった彼らも、それを望んでいるはずだ。そして、その灯に火を灯すのは、今という瞬間を生きているこの僕たちなのだ。



「沈黙」を読んで

21 半田修之

「重い」。この本を読み終えたその時の気持ちに一番近い言葉が、「重い」だった。まるで心の中に、灰色の空が果てしなく、延々と続いているような、そんな重い気分が残った。ため息が出て、少し疲れた。いや、だいぶ疲れた。

小説は、一六三八年、切支丹禁止令の中の長崎が舞台。ポルトガルのイエズス会から、二人の宣教師が苦難の船旅の末、ひそかに入国する。隠れ切支丹にかくまわれながら暮らす、キチジローという男の裏切りで、ついに捕えられる。そして、あらゆる苦悩の末に棄教する司祭と、神への問いかけが描かれている。

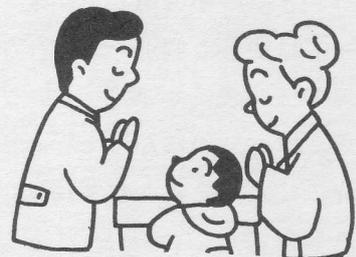
「神は本当に存在するのだろうか」という大きなテーマが中心になっているから、「重い」と感じるだけでなく、隠れ切支丹の農民の、貧困の様子からもそう感じられた。人々の外見のみすぼらしさは言うまでもなく、目や肌の黄色さ、口臭、体臭のひどさ、また、生活の状態の悪さは牛馬なみの状態である。そのような生活の中で、神を求め、パライス（天国）を求め、救われようとしたのだった。僕は基督教の教えを知らないし、聖書も読んだことがない。だから、神の存在など考えたこともなかったけれど、牛馬なみの人々の苦しい人生の中で、救いを求める気持ちは、本当に命をかけるほど強いものなのだろうと思った。

そして、命がけの信仰をすてさせる恐ろしい拷問。そのひどさは残酷すぎるくらいのものだ。波うちぎわに十字架をたて、キリストのようにしばりつける。でもすぐに殺すのではなく、何日もかけてなぶり殺すのです。潮が満ちると首の下まで海水につかり、しだいに力尽きて死ぬ。あるいは、海の中に、むしろでぐるぐるまきにして舟からけり入れる。一番ひどいのは穴を深く掘り、その中に逆さ吊りにして殺す方法などです。最期まで教えを捨てずに死ぬものもいるけど、隠れ切支丹に

教えを捨てさせる手段に踏絵を踏んで棄教した切支丹さえも、司祭が棄教すると言わせるために拷問にあわせられます。司祭は教えを捨てるか、人々を見殺しにするかをせまられます。必死に神に問いかけるが、神は黙ったままなのです。司祭の苦しみ、悲しみが、胸にせまってくる思いがしました。どちらを選んでも死ぬよりつらいのです。今、ここでこそ神を求めるけれども答えは与えられず、まるで何事もなかったかのように人々は死んでゆくのです。基督教を知らない僕でさえ、「なぜなんだ」という熱い思いが胸にこみ上げてくるのを感じました。

そして、キチジローの言葉も心に残りました。自分は弱い人間だから、裏切ってしまう。命をかけて信仰を守る人間になれない。けれども、キチジローも救われたいのです。信仰を求めるけれど、おくびょう者で弱いキチジロー。彼が本当に悪い人間ならば、司祭を裏切った時、お金をもらって姿を消して、もう二度と現れないだろう。けれどキチジローは、何度も司祭の前に来て、許しを願い、弱い自分に救いを求める。司祭は、キチジローとユダを重ねて、苦悩し、また、神に答えを求めます。僕は、はじめキチジローが嫌いだった。けれど、だんだんと彼の弱さがかわいそうで、また、あわれに思えてきた。彼の弱さは、人間性そのものであり、本当の人間の姿のような気がしたからです。

そして苦しみ抜いて棄教を選んだ司祭。最後に司祭はこう書いています。神は、沈黙していなかった。我々と一緒に苦しんでいたのだと。宗教の深さ、信仰の重さがずっしりと胸に残る思いがしました。



「蟬しぐれ」を読んで

21 藤原 舞

この物語は、ひとりの少年藩士が成長していく姿を描いたものだ。私は読むにつれて、江戸という時代に生きる彼らとの違いを感じずにはいられなかった。彼らとの大きな差。それは「責任感」の差ではないだろうか。

主人公「文四郎」は十六にして父を失った。切腹という処分を受けた父の遺体を引き取った文四郎。その彼の中に、どんな思いがあったのだろう。牧文四郎は牧という家を守っていかねばならない。罪人呼ばわりされながら、母を養っていかねばならない。そんな文四郎の責任感は何ほど大きいか想像もつかない。

私達にも「責任感」はある。日常生活のいろいろな所に、アルバイトなど仕事をもった時に。でも、文四郎達と比べれば小さなものだ。そんな責任感の大きさの違いはどういう所からくるのだろう。

一つ一つの行動をする「いま」という時間の意味が違うのではないだろうか。文四郎達の「いま」はその時間だけのものではない。それは、家を受け継ぐという過去のもの、その行動から生じる未来のものを持ち合わせる「いま」だ。私達に一番多いのは、その時だけの「いま」だ。これがおもしろい、恐い、悲しい、ムカつく、スリルがある、などなど。どれも、その時だけの感情が心を支配していて、「瞬間」だけの「いま」だ。そう考えると、責任感の大きさの違いが生まれるのもあたりまえである。

人生は「いま」の積み重ねで出来ていると思う。でも「いま」は決して個別として存在していない。過去があって「いま」がある。「いま」があって未来がある。すべてつながっているのだ。だからこそ、目先のことにとらわれずに「いま」を大切にしていかなければならない。

「いま」の意味の違いが一番でるのは、勉強だ

と思う。これは私達を悩ませることが多い。逃げたくなる。

「何でやってんの？ 将来使わへんやん。」

「これできんかって生活できるやん。」

「どうせ忘れんのに。」

「学年上がれたらいいねん。」

私はよく、こんなことを考えて逃げようとする。が、同時に本当にいいのか、とも考える。今、私達は勉強することを勉強していると思う。話や本から理解し、わからない所を調べる。これが勉強だと思う。単に物理や数学の公式を覚えることが勉強ではない。理解や調べるという習慣はどれほど社会で役立つか。また、そうして懸命になって勉強した成績は、将来自分が働いていく社会にどれほど影響するか。

つまり、「いま」だけをを考えて勉強するか、未来も加えた「いま」をを考えて勉強するか、ということだ。その考え方の違いで、自分の一生が決まるといっても過言ではない。

文四郎と私達のもう一つ大きな違いは、自分のやりたいことが自由にできること。身分や家柄のあった文四郎は、幕府が決めた職にしかつかなかった。それに比べて私達は、限りない自由をもっている。努力すればするほど可能性も広がっていく。ただ、自由がある分、苦しいとき逃げようとする甘えも多い。そんな時こそ「いま」という時間を考えるべきだ。そして乗り越えてこそ「いま」だった時間がムダではなかったと実感できるだろう。

私はまだ十六。何十年という人生はこれからだ。「いま」していることが、いつ、どのように現れるかわからない。でも絶対に後悔することがないように、「いま」を大切にしていこうと思う。



「いちご同盟」を読んで

2C 仁 田 友 佳

「いちご同盟」は、三人の十五歳の少年少女たちを描いた小説だ。

主人公の北沢良一は、同級生の野球部のエース、羽根木徹也から、自分の試合をビデオに撮ってくれないか、と頼まれる。そのビデオを持ち、徹也と一緒に、重傷の腫瘍で入院中の上原直美を訪ねる。直美と徹也は、おさななじみ。この日から、良一、徹也、直美の交流が始まる。

わたしは、数ページ読んだうちから、この「いちご同盟」の世界にどっぷりはまりこんでしまった。作品の中に、自分があるような気がした。それは、良一の目が見ているもの、耳が聞いているもの、それらがまるで、わたしが彼と同じ場所で、同じ景色を見、同じ音を聞いているかのように感じられたからだ。わたしは、吸い寄せられるかのように、読み続けた。

良一は、人間が生きるとはどういうことか？という大きな問題にぶつかっている。ピアノを習っているが、いったい何のために練習するのか、これからもピアノを弾き続けるのか、ということに迷いを抱いている。母は、ピアノ教師をしているが、良一とは、ピアノに対する考え方、演奏の仕方まで正反対。だが彼は、自分はこうだと言い切れるだけのものを持っていない。自分の持つ小さな世界が、それを取り巻くおとなの社会ともいえる別世界に圧迫されていることに痛みを感じ、自分が存在する意味に不安や迷いを感じている。

そんな良一は、ときどき小学五年生で自殺した少年のことを思い出す。少年も良一と同じような迷いを抱いていたのだろうか――。

徹也や直美と親しくなるにつれて、良一は、二人が自分とはまた異なる大きな苦しみを抱えていることを知る。

病気で片足をなくした直美の苦しみは、徹也にも、良一にも、もちろんわたしにも、理解するこ

とはできない。もし、理解できるというならば、それは単なる同情にすぎないだろう。同じく、徹也の野球に対する気持ち、良一のピアノへの気持ちも、その世界を知らない者同士にとっては、上辺のことしか理解できないのだ。そんなことがますます良一を苦しめる。

生きるとは何なのか――。

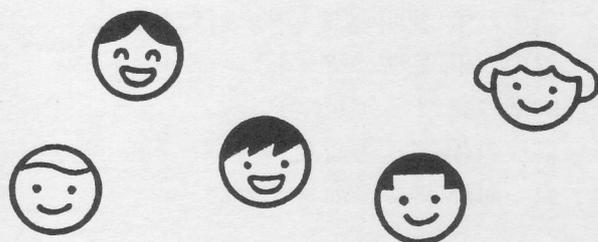
さまざまな壁にぶつかりながらも、良一は、自分の運命と戦っていく。進学の問題、家族の問題、恋愛の問題……。そして、直美を通じて、生命の重み、輝きに出会う。そんな中、良一と徹也は、ある日「同盟」を結ぶ。「^{いちご}一五同盟」だ。直美の輝きを心にしまったのだ。

「いちご同盟」は、中学生たちを描いた小説だが、同時に、おとなたちの姿も描いている。わたしは、良一の父が言った、「おとなになるにつれて、夢は一つ一つ消えていくものだ。」という言葉が、強く印象に残っている。きっと、その通りなのだ。わたし自身、幼い頃描いた理想とは違った生活を送りながらも、現在を精一杯生きている。これからもそうなのだろうか。今、抱いているわたしの夢も夢のまま終わってしまうのだろうか。だが、たとえ夢のまま終わったとしても、それがわたしの運命なのだ。計画を立て、その通りにいく人生なら、夢を見る必要なんてないのだから…。

友情、恋愛、学校生活――わたしが出会ったすべてのものが、たとえ、理想に反した部分があっても、最初からこうなるはずの運命だったのだ。そして、この運命とどう戦うか、どう愛するか、どう生きていくのか、ということが良一がぶつかった壁ではないかとわたしは思う。

人間はなぜ生きていくのか――。

わたしは、この小説から、生や愛といった、ごく当たり前だけれども、普段は忘れてしまっている――そんな大切なことを教えられた気がした。



第11回 ブック・ハンティング

第11回ブックハンティングを実施

毎年恒例となっているブックハンティングを、11月26日（木）市内の書店において実施しました。教官、図書館職員を含む約11名の学生図書委員たちが集まり、それぞれに欲しい本、気に入った本を買いました。あさりましたが、さて、その成果は…

今回のブックハンティングによって、次の71冊が新たに本校図書館の蔵書となりました。せいぜい利用されることを願っています。

ブックハンティング購入リスト

書名	著者名
「もののけ姫」はこうして生まれた。	浦谷年良
あなたの心が壊れるとき	高橋龍太郎
英会話 とっさのひとこと辞典	巽 一郎
空想科学大戦！	柳田理科雄（原作）
既死感（上）	キャスリーン・レイクス
既死感（下）	キャスリーン・レイクス
村上朝日堂 はいほー！	村上春樹
雨天炎天 ギリシャ・トルコ紀行	村上春樹
村上朝日堂の逆襲	村上春樹
蛍・納屋を焼く・その他の短編	村上春樹
村上朝日堂	村上春樹
きみのためにできること	村山由佳
野性の風	村山由佳
新選組始末記 新選組三部作	子母澤 寛
新選組遺聞 新選組三部作	子母澤 寛
凍月（いてづき）	グレッグ・ベア
ホンダ創業者 本田宗一郎語録	本田宗一郎研究会（編）
ソニー創業者 井深大語録	井深大研究会（編）
落選確実 選挙演説	ビートたけし
女は死ななきゃ治らない あえて大和撫子改造講座	ビートたけし
新選組斬人剣 小説・土方歳三	早乙女 貢
摩天楼 葉師寺涼子の怪奇事件簿	田中芳樹
風の万里 黎明の空（下） 十二国記	小野不由美
風の万里 黎明の空（上） 十二国記	小野不由美
凶南の翼 十二国記	小野不由美
群狼の牙 禁門の政変	ゆうき りん
東の海神 西の滄海	小野不由美

最新 バイクオールカタログ 626台
1998-1999自動車ガイドブック 国産車1500台掲載
秘蔵の不許可写真1 毎日新聞秘蔵
バンド・スコア ハロウィン／ベター・ザン・ロウ
バンド・スコア グリーン・デイ／ニムロッド
スコア・ブック ザ・ハイロウズ／ロブスター
発掘！ あるある大事典2
発掘！ あるある大事典
一般常識の神様仏様 SPI 対応 実践問題満載 2000年版
SPI 英語能力 2000年版
SPI 性格自己分析 性格分析と適職研究 2000年版
第一種短期集中ゼミ 新カリキュラム対応
花時計
完訳＝釣魚大全
エンデと語る 作品・半生・世界観
法然 対 明恵 鎌倉仏教の宗教対決
98-99年版 間違いだらけの外国車選び 全車種徹底批評
カルタゴの運命
完全マスター！ 家庭料理 女子栄養大学の基本レシピ
2000年版 時事用語事典 就職試験対策必須本
利己的な遺伝子
夜明けまで1マイル
空想非科学大全 科学を拒絶する空想15の法則
幽霊のような子 恐怖をかかえた少女の物語
ああ言えばこう食う 往復エッセイ
精子戦争 性行動の謎を解く
弱き者は死ぬ
ヴァイツゼッカー回想録
イエスの遺伝子
BAD KIDS バッドキッズ
青のフェルマータ
最後の手紙
ティラノサウルスの育て方
ひとり歩きの京都“観る旅”“歩く旅”のガイドブック
1200年の歴史を秘めた 京の古寺あるき 通の行く京都
人はなぜ、気が狂うのか？
右脳の冒険
なりたい私になる
夢占い
ほしのたびびと
惑星の暗号
約束された場所で underground 2
クライシスF
チョコレート語訳 みだれ髪II

辰巳出版(編)
自動車工業振興会(編)
毎日新聞社(編)
ハロウィン
グリーン・デイ
ハイロウズ
有野有三(編)
有野有三(編)
就職情報研究会(編著)
小林正彦
適正能力開発委員会(編)
日本ユニシス情報処理システム教育研究会
津村節子
アイザック・ウォルトン
子安美知子
町田宗鳳
徳大寺有恒
眉村 卓
滝口 操(監修)
池田書店(編)
リチャード・ドーキンス
村山由佳
柳田理科雄
トリイ・ヘイデン
壇 ふみ
ロビン・ベイカー
亀井 宏
リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー
マイクル・コーディ
村山由佳
村山由佳
リチャード・P・エヴァンス
非日常研究会
JTB
メディアユニオン編
小田 晋
コリン・ウィルソン著
中谷彰宏
ジュヌビエーヴ・沙羅
舟橋克彦(文)
グラハム・ハンコック
村上春樹
井谷昌喜
俵 万智



数ある図書委員の仕事の中でも最も重要なものの一つにブックハンティングがあります。僕もこの日は楽しみにしています。ブックハンティングとは、図書館に新たに入れる本を選ぶために直接図書委員達で書店へ出向く事をいいます。奈良高専図書館では、年2回、郡山駅近くの書店にてブックハンティングを実施しています。書店で図書委員達は、「ぜひ奈良高専図書館へ!!」という本を選び、あらかじめ用意している段ボール箱に入れていきます。ここで選ばれる本は、基本的に雑誌以外は何でもOKですが、なるべく続きものを選ぶようにしています。(上・中・下とか①②③といった感じのもの) 予算は、一人五千円程度まで買う事ができますが、僕の場合いつも五千円をオーバーしてしまうので、どれを止めるか決めるのが大変です。(本当は全部ほしいのですが…) 段ボール箱にたくさん入れられた本達は、今図書館にある本と重っていないかチェックされ、後日図書館へ届きます。そしてバーコードを張る等の準備をへて、図書館に新しい本が並ぶ事になります。ブックハンティングは、生の読者の代表である図書委員が直接本を買いに行くので、読者のニーズに合った本を図書館に入れる事ができます。次回のブックハンティングは6月に行われると思います。みなさんも「ぜひこの本を図書館へ!!」といった希望があればどんどんリクエストして下さい。あるいは、自ら図書委員となってブックハンティングに参加するのはどうですか？

図書館からのお知らせ

★学年末休業中の図書館利用について

- ・開館日時 3月19日(金)～4月5日(月) 8:30～17:00まで
土曜・夜間開館はありません
- ・閉館日 4月6日(火)～7日(水) 館内整理、新年度準備のため
- ・貸出冊数 6冊まで 3月1日(月)から貸し出します。
- ・返却日 4月8日(木)までに返却

なお、卒業予定者は卒業式当日までに必ず返却してください。もし、紛失した場合は、図書館カウンターにてご相談ください。

★新しいシステム「情報館95」に更新して1年が経ちました。新システムでは個人の貸出履歴を見ることができます。この1年間に図書館で借りた本のリストを欲しい人はカウンターまで申し出てください。印刷して差し上げます。あの時読んだ本、あれなんて本だったっけ、もう一度読みたいんだけど。レポートを書くために借りたあの本、どれだったっけ。こんなことってよくありますね。そんな時にも遠慮なくどうぞ。ただし、調べることのできるのは本人の分だけです。いずれの場合も学生証をお忘れなく。

編集後記

表紙は、今回も本校名誉教授 石垣 昭先生の作品を使用させて頂きました。しかも今回は、カラー化が可能となりました。巻頭言は、前図書館長としてご活躍されました一般教科の細井先生にお願いしました。また、同窓会元会長・後援会会長の中林義夫氏から特別寄稿を頂戴しました。

お忙しいところ快く執筆をお受け頂いた皆様に、心より感謝いたします。(委員一同)